

湛慶作雪蹊寺毘沙門天立像の制作工程について

—神将形像における運慶様の継承と変容—

中村志野(東京藝術大学)

本論は、神将形像の工法に着目し、従来の調査方法に加え、赤外線による3D計測を用いることにより、湛慶及び湛慶世代の奈良仏師による作風展開について造像技法の観点から考察を試みるものである。

雪蹊寺毘沙門天立像(以下、雪蹊寺像と略称)の右側面材は、体幹部材を約2.5cm削り込んだ位置に矧ぎ付けられている。そのような寄木構造とする根拠として、割脚を円滑に行うためであることを指摘する。

割脚は、脚部を一旦割離し、再び接合する工法であり、脚部の彫刻を容易にする目的が考えられる。ただし、差し込み代を長くとり、刃物を打ち込み、亀裂が十分に入ったとしても、割れ目の間には繋がった繊維が多少残り、脚部を円柱形に引き抜くのは困難を要する。そこで、刃物を打ち込んだ後、矧ぎ目で一旦解体し、横倒しの力を加えると、無理なく割離することが可能となる。雪蹊寺像は、右側面材の矧ぎ目を膝周りの径に近づけることで、割離す部分が抜け勾配になり、円滑に割脚が出来る状態を作り出している。

また、割脚施工前の、脚部背面を裙が覆っている状態の彫り難さは、裙の大部分を含む背面材を取り外し、独立した裙と脚部を各々彫ることで解消される。すなわち背面材の有無とその矧ぎ位置が脚部の彫刻に大きく影響することが判明した。

以上のような雪蹊寺像の構造的特徴を踏まえ、雪蹊寺像及び、運慶による願成就院毘沙門天立像(以下、願成就院像と略称)、肥後定慶による東京藝術大学毘沙門天立像(以下、藝大像と略称)の3像について、断面や動勢について、3Dデータを用い比較考察したところ、3像の量感に大きな差はなく、動勢は、雪蹊寺像が少ないことが判明した。また、構造については、願成就院像と雪蹊寺像は、体幹部材に左右2材を矧ぐ点は共通しているが、雪蹊寺像は胸幅が体幹部材の最大幅になるよう木取りされ、2材の矧ぎ位置が正中を通るのに対し、願成就院像は、単純に体幹部全体を2分した木取りとなっている。また、藝大・雪蹊寺像は背面材や側面材の矧ぎ位置、割脚施行箇所によく似た構造が見られた。そのことから、願成就院像から藝大・雪蹊寺像へ移行する期間に工法の体系化が進んだことが予想される。このような構造の変化は、造像作業の合理化を進め、材木の節減を促すと同時に、彫刻の空間表現には縮小傾向を引き起こした。

また、奈良仏師による他の神将形像についても、毘沙門天立像同様の構造の変化が見られ、転機となる作例として、東大寺大仏殿の鎌倉再興四天王立像を想定した。同四天王像は、鎌倉時代の神将形像に新様式をもたらした画期的な像であり、藝大像や雪蹊寺像を含む後世の神将形像に多大な影響を与えたことは既に論じられており、その工法に関しても新しい試みが実行された可能性が考えられる。